第五回

フョードル・ドストエフスキー『貧しき人々』

皆さん、こんにちは。はやくもドストエフスキーまで来ました。ドストエフスキーは二十一世紀の今日でもなお「リアル」に、言いかえれば「わが身に引きつけて」読むことのできる作家です。まだ彼の作品を読んだことのない人にはぜひ挑戦していただきたい。ということで、二回にわたって取り上げます。

ロシア文学と「わたし」

近代においてもっとも大切な、もっとも中心的な概念は何か？ さまざまな意見があるところですが、私は「主観」でないかと思います。「自由」や「平等」といった理念よりも重要な、近代的思考のエンジンとも言うべき概念です。

ご存知の通り、デカルトは『方法序説』(1637) で「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉を記しました。この「われ思う (Cogito)」こそ、近代的主観の誕生と言えるでしょう。「考えるから、存在する」というのは不思議な命題です。ふつうはその逆、「存在する (生きている) から、考えることもできる」となるでしょう。デカルトはそれをひっくり返して「われ思う」、すなわち意識なり主観が先にあるとしました。「ゆえにわれあり」、もっと言えば「ゆえに世界あり」ということです。人間主観の働きがあって初めて、世界も存在するのです。

粗い比喩になりますが、人間主観は万人共通のOS（オペレーティング・システム）に喩えられます。「われ思う」というOSが働くから、「世界」というプ

ログラムが立ち上がるのです。人類は同じOSを持っており、そのため共通の世界が立ち上がっているのだと考えられます。

近代は「客観重視」の時代だと思う人もいますが、むしろ逆です。人間の主観を出発点（原理）としたところに、近代的思考の最大の特徴があります。神（ないしその他の至高存在）が人間の「われ」を根拠づけるのでなく、「われ」が「われ」自身を根拠づけるのです。「自分で自分を支えるわれ」――これが近代的主観のモデルです。

一例を挙げると、カントは「人を殺すなかれ」のような道徳法則は何によって根拠づけられるかという問題を立てています。何が正しいかでなく、どうしてそれが正しいと言えるのかと問うたのです。神がいれば「神が禁じたから」と言えば済みます。しかし神をいったん括弧に入れ、人間の視点のみに立つとき、一体だれが「殺すなかれ」と言うのでしょうか。「純粋理性はもっぱらそれ自体のみで実践的〔行為遂行的〕であり、（人間に）普遍的法則を与える[21]」というのがカントの答えでした。言いかえれば「われ」が「われ」に命ずるのです。カントの証明が成功しているかどうかはともかく、近代的思考の真髄とも言うべき議論です。

「自分で自分を支えるわれ」というモデルは近代文学においても重要な役割を果たします。人間主観、意識、内面などの主題が開拓すべき原野として現れました。自意識、告白、想像力、幻想などのモチーフはこの開拓地に育ったものです。自分自身の思考によって自らの存在を根拠づけられる人間、「われ思う、ゆえにわれあり」と言える人間、つまりは「近代人」が近代文学の主人公となりました。

ではロシア文学の場合、どうだったでしょうか。ここでも後発国特有の現象が起きました。「われ思う、ゆえにわれあり」、大いに結構。しかし人間が自分自身を根拠づけることなど本当に可能か、という問い返しがなされたのです。ロシアでは西欧に較べて社会の世俗化（脱宗教化）が遅れていました。その分だけ神を括弧に入れるのは難しかったでしょう。自分で自分を支えるには、人間の意識はあまりに脆いものと見えたのです。

---

[21]『カント全集 7　実践理性批判／人倫の形而上学の基礎づけ』岩波書店、2000 年、167 頁。

スラヴ派と呼ばれたロシアの思想潮流では「全一性（ソボルノスチ）」という人間観が創られました。これは深遠な概念ですが、元になる「ソボル」という語が「集まり」や「大聖堂」を意味することから、集合性や宗教性と結びつきがあります。簡単に言えば「全の中の一」、「全体的調和における個々の人格」を示そうとする概念です。森安達也先生によれば、「個人が完全な自由と人格を保持しながら、全体の共同的生活に参画する[22]」という理念です。その際、全体を統べるのは神であり、人間が人間だけで立つという考えは思い上がりでしかありません。

ソボルノスチの思想は文学にも影響を与えました。人間は個的存在か集団的存在か、自律的存在か他律的存在か、という問いがロシア文学の重要な主題となったのです。これはまさに後発国ならではの「近代との格闘」です。その格闘をもっとも激しく闘った一人がドストエフスキーに他なりません。

ドストエフスキー文学の現代性

ドストエフスキーについてはこれまでたくさんのことが語られてきましたし、これからも語られるでしょう。私としては、ドストエフスキーが「十九世紀の小説家のうち、もっとも二十世紀文学に影響を与えた作家」である点を強調したいと思います。ロシアだけでなくヨーロッパ、さらに世界全体に話を拡げてもそう言えるでしょう。ドストエフスキー以上に偉大な作家や、彼の小説より優れた小説は存在します。しかし二十世紀の世界文学への影響力という点でドストエフスキーを越える十九世紀の小説家はいないでしょう。

問題は、ドストエフスキー文学のどのような点がそうした影響力を持ったかです。この点についてもさまざまな議論がなされていますが、私の見るところ、近年では次の二点がもっとも有力のようです。

（1）対話性　ドストエフスキーの小説に対話が多いことは、彼の作品を読めば、だれもが気がつきます。対話が多くて読みやすいという人もいれば、対話ばかりで訳が分からないという人もいます。

---

[22] 川端香男里他監修『新版ロシアを知る事典』平凡社、2004 年、428 頁。

対話の多さをたんなる技法でなくドストエフスキー文学の根本原理と見なしたのがロシアの思想家、ミハイル・バフチン（1895-1975）です。人間の意識はそれ自身で自足・完結せず、他の意識との対話関係につねに巻き込まれており、私たちが「自分の心（内面）」と感じている領域もすでに他者の言葉に充たされており、それらとの絶え間ない対話こそ「わたし」であるという人間観を、バフチンはドストエフスキー文学から導きました。

こうした人間観がドストエフスキー文学の根幹にあり、彼の小説はそのように組み立てられているというのがバフチンの議論です。これはドストエフスキー論として画期的だっただけでなく、ドストエフスキー研究の枠を越え、さまざまな学問領域（言語学、社会学、教育学、人類学、精神医学など）に広がりました。ドストエフスキー文学が二十世紀、さらには二十一世紀も読まれ続けている一つの要因として、バフチンの「対話主義的」な解釈があるでしょう（バフチンについては後期の授業でも扱います）。

（2）宗教性　ソ連時代、「ドストエフスキーとキリスト教」というテーマは研究しにくいものでした。ドストエフスキーは皇帝権力を支持し、社会主義を批判した「反動」と見なされていたのです。一方、キリスト教も取り上げにくいテーマでした。何しろマルクス主義は「宗教は民衆のアヘンである」と称していましたから。つまりドストエフスキーもキリスト教も「危ないテーマ」だったわけで、その組み合わせとなればなおさらです。

ソ連解体後はすっかり様変わりしました。ドストエフスキーについて論じるのは何の問題もない。またご存知の通り、ロシア正教会の復活も著しい。その結果、「ドストエフスキーとキリスト教」や「ドストエフスキーとロシア正教会」といったテーマは定番となりました。

以上はあくまで本国ロシアの状況ですが、ドストエフスキー文学が二十世紀文学に対して持った影響力の一つに、宗教性の深さが挙げられます。神の問題は近代文学にとって重要かつ困難な主題でした。人間の視点から、つまり人間ベースでものごとを究めようとしたのが近代です。そうだとすれば、神の問題を論じるときも、あくまで人間の視点から問いを立てなければいけません。それは要するに、神様をいったん括弧に入れてしまうということです。しかし括弧に入れてしまえるような神が本当の神と言えるでしょうか？　この問題が後

半生のドストエフスキーを悩まし、作家として大成させたと考えられます。

かつて批評の神様と呼ばれた小林秀雄は、なぜドストエフスキーについて書くのをやめたのかという質問に「キリスト教が分からない」と答えたという有名な逸話があります。たしかにドストエフスキーの小説を読み続けていると、キリスト教の文脈や思想が気になってきます。日本人としての理解の限界を感じることもあるでしょう。

しかし「キリスト教徒でなければドストエフスキーを読んでも分からない」と言う人には「小説って何でしょう？」と質問したいと思います。近代の小説家は自分自身の信条（宗教、思想、政治上の）を述べるために小説を書いたのではありません。それならば論文を書けばよいので、実際、ドストエフスキーやトルストイは評論もたくさん書きました。

小説家は何のために小説を書いたか？ 何度もくり返して恐縮ですが、自国の社会が近代化するさまを可能なかぎり全体的に描くためです。そこでは宗教の問題も出てきます。近代化を押しとどめようとする守旧勢力の代表として、しかしまた、近代化のスピードについていけない主人公の支えとしても、宗教は描かれました。こうした宗教の二面性には、ロシア以外の近代後発国の作家たちも注目しました。

たとえば漱石の『門』を思い出してみましょう。主人公の宗助は自分がかつて犯した過ちに苦しめられた挙句、禅寺に逃げ込みます。ところが修行（入門者向けのごく易しいもの）に耐えられず、すぐに妻のもとに逃げ帰ります。その姿は読者の目に哀れにも滑稽にも映ります。しかし、急速に近代化する社会に生きづらさを感じる人間の一つの行動パタンとして、読者の共感も誘うのです。

その意味で、キリスト教をよく知らない読者でも、ドストエフスキーを読んで分かることはあるはずです。もちろん、日本人とロシア人では読み方はずいぶん違ってくるでしょう。しかし「違う読み方をする」のは「分からない」とは別のことです。違う読み方から新しい解釈の可能性も生まれるのです。

『貧しき人々』から

以上述べてきたことからすると、今回取り上げる『貧しき人々』はそれほど

すごい作品かな、と思われるかもしれません。ペテルブルグに住むうだつの上がらない小役人（またしても！）の中年男性と薄幸の娘の往復書簡というのはいささか地味な設定です。

『貧しき人々』はドストエフスキーのデビュー作でした。ペテルブルグの工兵士官学校を卒業後、一年ほど勤めた役所を辞め（「役所勤めはジャガイモのように退屈です」という兄への手紙が有名です）、退路を断って書き上げた処女作が批評家ベリンスキーの絶賛を浴び、華々しいデビューを飾ります。その後、非常に苦労するのですが、それはまた次回お話しましょう。『貧しき人々』はそれなりに長い小説なので、ここでは「ワーリャの思い出」という章を中心に取り上げます。

〔あらすじ〕中年の官吏マカール・ジェーヴシキンは貧しい生活の中、薄幸の娘ワーリャ（ワルワーラ）を経済的に援助している。二人は近所に住んでいるが、実際に会うよりも手紙をやりとりすることが多く、その往復書簡がそのままこの小説となっている。

ある時、ワーリャはジェーヴシキンの親切に応えようと、思春期のころの思い出をつづった回想をプレゼントする。ペテルブルグに出てくる前の楽しかった田舎暮し。家族総出でペテルブルグに出てきた後の金銭的苦労と寂しさ。家運を盛り返せないまま亡くなる父親。よんどころなくワーリャは病弱な母と二人で、アンナという遠縁の女性が経営する下宿に身を寄せるが、彼女はワーリャたちにひどく恩着せがましい。それに何やらいかがわしい稼業に手を染めているようだ。

ワーリャは下宿でポクロフスキーという青年と知り合いになる。彼は貧しさと病気のために大学を中退せざるを得なかったが、アンナの下宿で勉強を続けている。ポクロフスキーには、役所を首になった酒びたりの老父がおり、時々息子を訪ねてくる。ワーリャはこの父子と仲良くなり、お金を出し合って、ポクロフスキーの誕生日にプーシキン全集を贈る。淡い初恋。しかし青年の肺病が悪化し、ワーリャの看病もむなしく亡くなる。老父は大声で泣きながら、墓場に向かう息子の棺桶を追う。ワーリャは母を抱きしめ、この「最後の大切な友」を失うまいと思う。だが、その母も肺病で亡くなり、ワーリャは天涯孤独の身となり、マカール・ジェーヴシキンと出会う。

今回、とくにワーリャの回想を選んだのは二つ理由があります。一つは、話としてまとまりがよく、読みやすいことです。作品全体の中に置いたとき、このまとまりの良さはいささか異質です。というのも、『貧しき人々』は一見単純な作りのようでいて、じつはさまざまな手法や主題が組み合わされた作品です。二人の主人公の手紙は素朴な内容でありつつも、隠れた論争やすれ違いに充ちています。彼らの手紙を通してしかできごとが再現されないため、何が起きているのか読者によく分からないこともしばしばあります。それらはすべてドストエフスキーが意図的に仕組んでいるのです。

そんな中、ワーリャの回想はそれ自体として完結しており、川の中の小島のようなまとまりを持っています。作品全体からすると、この章はすこし古い、センチメンタルな感じがしますが、その分すっきりした読後感を与えます。

この章に注目するもう一つの理由は、『貧しき人々』を訳した安岡治子の解説を読んでいて「うん、うん」と思うことがあったからです。この小説の最新の研究動向を詳しく紹介した後で安岡さんはつけ加えています――「けれどもその一方、さまざまな仕掛けや解釈などいっさい抜きにして、素直に主人公の声に耳を傾けながら、ジェーヴシキンやワーレンカ、それにポクロフスキー老人やゴルシコフ一家にも心を寄せて、思い切り泣かせてもらいたいような気もするのである[23]」。

私が感心したのは、専門家・研究者としてこういう感慨を口にするのは勇気が要るからです。小説家が意図的にセンチメンタルに書いたものをそのままセンチメンタルに読んでしまっていいのか、と突っ込まれそうなところです。しかし安岡さんの感想が的を射ていると思えるのは、センチメンタルさがドストエフスキー文学の重要な要素だということがあります。

たしかに晩年の長編小説群では、センチメンタルさは他の要素（社会的、思想的、宗教的テーマ）に中心的役割を譲ります。それでも『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』には、いたいけな子どもや情けない父親についてのセンチメン

---

[23] 安岡治子「訳者あとがき」、ドストエフスキー『貧しき人々』安岡治子訳、光文社古典新訳文庫、2010 年、333 頁。

タルなエピソードが少なくありません。ドストエフスキーの描く情けない父親――ワーリャの父親、老ポクロフスキー、マルメラードフ（『罪と罰』）、ヴェルシーロフ（『未成年』）、老クラソートキン（『カラマーゾフの兄弟』）――と彼らを哀しくも愛する子どもたちに涙した読者も少なくないでしょう。

センチメンタルとは言いかえれば「度を越した真情（友情、愛、感激など）の吐露」であり、ドストエフスキーの人間描写の重要な要素をなしています。

ワーリャの回想でもう一つ注目したいのは、「自分で自分について語る」という形式です。この形式は『貧しき人々』全体を規定しています。ジェーヴシキンもワーリャも、手紙の中でいちばん語っているのは自分自身のことです。

そこで問題になるのが「自分自身について自分の言葉だけで語ることは可能か」という点です。先ほど触れた対話性の要素を思い出してください。他人の言葉に影響されることなしに、あるいはそれらに応答することなしに、自分自身について語ることはできないというのがドストエフスキーの洞察なのです。

一例をあげると、ジェーヴシキンがワーリャに勧められてゴーゴリの『外套』を読む、というエピソードがあります。ジェーヴシキンは憤然とします――なぜ他人の生活をこんなに暴くように描くのかと。彼が怒ったのは『外套』の主人公アカーキーに自分自身の姿を見たからです（ジェーヴシキンもアカーキー同様、清書係でした）。「自分たちは世間からこんなふうに見られ、書かれているのか！」という衝撃が彼を襲ったのです。

だからジェーヴシキンは、自分についての「他者の言葉」を思い浮かべ、それに必死に反論します。「いや実際、清書屋だからなんだっていうんです！ 清書屋のどこが悪いんですか！《あいつは清書屋なんだよ！》《あのネズミみたいな木っ端役人は、書類の清書が仕事なのさ！》でも、何を恥じることがありましょう？（……）仮に誰も彼もが創作を始めたら、いったい誰が清書をするんです？ こう訊ねたいですね。どうぞ答えてください[24]」。

---

[24] ドストエフスキー『貧しき人々』安岡治子訳、光文社古典新訳文庫、2010年、112–113頁。この場面の分析については、バフチン『ドストエフスキーの創作の問題』桑野隆訳、平凡社ライブラリー、2013年、189–193頁。

こうした自意識の描写はゴーゴリにはありませんでした。ドストエフスキーの新機軸です。「他人に見られていることを意識し、他者の言葉に応答し続ける自意識」を主人公の心に埋め込むために、ドストエフスキーは使い古された「ペテルブルグもの」の設定を再利用し、主人公に『外套』を読ませるという手の込んだことをしたのです。二十代半ばの駆け出し作家の芸当とは思えません。天才はデビュー作から老成していると言いますが、ドストエフスキーによく当てはまる言葉です。

晩年のドストエフスキーはデビューのころを回想した文章で、ベリンスキーが「君は自分がどんなものを書いたか分かっていますか？ いや、君の若さで分かるわけがない」と興奮を隠さなかった、と書いています[25]。批評家はしばしば、当の作家以上に深いものを作品に読む、あるいは読んだと信じることがあります。ベリンスキーがドストエフスキー以上に『貧しき人々』を深く読んだかは分かりません。しかし、若きドストエフスキーも自分が作家としてどう成長してゆくか知るよしもなかったのです。その意味では批評家の言葉は正しかったと、今や大作家である老ドストエフスキーは言いたかったのでしょうか。

というわけで、次回はもう一度ドストエフスキーを読んでみましょう。彼の最後の、そして最高の長編小説『カラマーゾフの兄弟』を。

読書ガイド

フョードル・ドストエフスキー『貧しき人々』木村浩訳、新潮文庫、1969 年。
フョードル・ドストエフスキー『貧しき人々』安岡治子訳、光文社古典新訳文庫、2010 年。
ドゥニ・カンブシュネル『デカルトはそんなこと言ってない』津崎良典訳、晶文社、2021 年
高橋誠一郎『ロシアの近代化と若きドストエフスキー 「祖国戦争」からクリミア戦争へ』成文社、2007 年。
ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男他訳、ちくま学芸文庫、1995 年。

[25] ドストエフスキー『作家の日記』川端香男里訳、『ドストエフスキー全集　第 18 巻』新潮社、1980 年、300 頁。